住む世界

山梨学院中学校三年　　矢野　康太郎

私が住む山梨県北杜市は豊かな自然に囲まれる山紫水明のまちです。四季に移り行く木々の色はとても圧巻で毎年多くの人が訪れます。しかし夏に萌黄に染める葉や秋に紅葉色に染める山が私は生まれた時から見ることができません。いわゆる先天性色異常です。私は異常三色型色覚第一色弱です。異常三色型色覚とは、三色全てを感じることはできますが、その感じ方が正常者とは異なります。また、紛らわしい色の区別がしにくいものです。第一異常は赤色の色覚異常を指し、その場合第一色弱と言います。

緑や赤が違った色に見える世界は不便もあります。黒板で赤色のチョークで文字を書かれると何も読み取れなかったり、クリスマスカラーやサンタだって違います。野菜も茶色に見えるため美味しそうに見えません。他のひとと違う世界の色で暮らしているのです。しかし私はこの色覚異常で自分をダメだと、人と違うから価値がないと感じたことは一度もありません。それは小さな頃から他人の子供と違った自分を認め、いいところを伸ばして育ててくれた両親や周りの人たちの環境があったからです。人よりも欠けている部分があるとも言える自分を他と比べることもせず、個性として育ててきてくれたことがどんなに大切なことだったか考えさせられます。

しかし僕が他の人とは違う色覚異常によって差別だと感じたことが一回だけありました。僕は小学校受験をして中学受験をして今の学校に通っています。なぜ地元の小学校へ通わなかったのか、それは色覚異常が関係しています。僕は緑色が光の加減によって見えず、緑色の背景に赤の字を書かれると何も読み取ることができません。僕の姉は公立小学校に通っていたので、母が授業参観の際に見たあることで入学することは厳しいと感じたと言います。それは、重要語句を黒板に赤色のチョークや黄色のチョークで書いていることでした。他の人からしたら、たったその一つのことです。しかし、色の違いによって判別が不可能になる自分にとって大きな壁でした。中学校への入学をすることで何よりも両親や自分が危惧していたことは、通学や勉強ではなく文字が見えるかということでした。僕の両親は全ての学校に僕に色覚異常があること、黒板の文字が見えないことを伝えて、対応してもらえるのかということを聞いて回りました。電話した一件の学校の中に、こんなことを伝えられたと母は話してく

れました。
「一人の生徒のために赤色のチョークの使用を控えることはできない」
学校の意見も理解できない訳ではありません。しかし僕は少し違和感を覚えました。僕も一人の生徒で色覚異常を持っていない他の生徒と変わらない学習を受ける権利があります。それを色覚異常で見えないから、学校で学習することは困難だと言われることは違うと思っています。学習する権利は、たとえハンディキャップを持っていたとしても平等に分け与えられるべきだと僕は強く思っています。今僕が通っている学校は色覚異常なことを伝えると、色覚異常の理解を示してくれた学校です。理解してくれること、認めてくれることがどんなに恵まれていることなのかを考えることができました。

世の中には色覚異常の方だけではなくハンディキャップを持って生活している人が多くいます。その人たちのことを「理解する」ということは必ずしも障害者というレッテルを貼り付け、特別扱いすることだけではないと思っています。しかし、そういったハンディキャップを持っている人たちにも他の人とは変わらない平等な権利を持つ人間です。その人たちも過ごしやすい世の中にしていくためには、個性として認めてくれる価値を見出してくれる環境があることが大切だと思っています。いつの日か僕の色の世界も他の人とは一味も二味も違う四季も多くの色覚異常者の人が当たり前に権利を主張できることを願っています。その人たちが声を上げることができる世の中になったとき、本当に色覚障害の方やハンディキャップを持っている人のことを「理解した」と言えると考えます。